
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第25号 2018年3月

東北・山形で地域に学ぶ意義

— 本学大学院デザイン工学専攻地域デザイン研究領域の使命 —

Significance of Learning Locally in the Tohoku Region and Yamagata

— The Mission of the Faculty of Localized Design in the Graduate School of the Tohoku
University of Art and Design —

志村 直愛 | SHIMURA Naoyoshi

東北・山形で地域に学ぶ意義

～本学大学院デザイン工学専攻地域デザイン研究領域の使命～

Significance of Learning Locally in the Tohoku Region and Yamagata
— The Mission of the Faculty of Localized Design in the Graduate School of the Tohoku University of Art and Design —

志村 直愛 | SHIMURA Naoyoshi

In 2015, Master Degree in Design Engineering, established in 1996, drastically reformed its organizational structure reflecting the social change caused by The Great East Japan Earthquake. As a University of public privatization, Regional Design area course is newly established as an integrated faculty providing interdisciplinary collaboration between Product Design, Environmental Design and Graphic Design, and take an important role to revitalize Tohoku region. Graduates from various academic backgrounds, including students from foreign countries and working people, join our course and study to meet Yamagata's regional peculiar needs.

Keywords:

東北、山形、大学院教育、地域デザイン

Tohoku region, Yamagata, graduate education, localized design

本学は開学25周年を迎える。学部の先の教育機会となる大学院芸術工学研究科が設置されたのは、その4年後の1996年、以来、芸術文化、デザイン工学の2つの専攻で修士課程学生を育てている。このうちデザイン工学専攻は、本学デザイン工学部の延長線上にあり、各学科の専門分野を冠した生産デザイン、環境デザイン、ビジュアルコミュニケーションデザイン(グラフィック、映像)情報計画、文化財情報科学、コンテンツプロデュースの領域からスタートした。その後学部の学科改変により、名称変更、整理統合が計られ、プロダクトデザイン、環境デザイン、グラフィックデザイン、映像の4領域で展開してきたが、学部へ新たに企画構想、コミュニティデザインなどの学科が設置され、また既存の学科の中で大学院進学への方針や指向性の違いがあることなどを鑑み、2015年度から領域構成を大幅に見直し、プロダクト、環境、グラフィックを合併して地域デザイン研究領域とし、映像領域との二本立てに改編した。きっかけは、2011年の東日本大震災からの復興、少子高齢化や人口流出など、東北が抱える様々な地域課題の解決、循環型エネルギー社会の実現をはじめとするライフスタイルの転換に寄与していく人材育成を目指し、東北という地域の要請に基づく新たなプロダクト、グラフィック分野のデザインを担う、また建築・環境はまさに地域そのものが地盤、その研究実践の舞台となることから「地域デザイン研究」という領域名を冠することとなった。特に、改編の狙いとして、これまで学科別の延長線上として各領域個別の教育過程で設計されていた教育プログラムに加え、地域を学ぶ上で必須となるフィールドワーク、地域誌の編集、地元でのコミュニケーションのためのワークショップを学ぶ共通演習を開講し、地域へ研究、実践の舞台を広げる教育の仕組みを準備した。ま

た、大学院過程の中では、共通の演習や授業のほか、日常生活を送るゼミ室の学生配置編成や、合同ゼミやレビューなどの研究経過発表の機会を設け、専門分野を超えた仲間との研究、実践成果の情報共有、意見交換が積極的に行えるよう考慮されている。

こうしてスタートした地域デザイン研究領域には、志願段階では社会人で進学を希望する者や、他大学からの進学希望学生、また特にアジア圏を中心とした海外の学生からの問い合わせが増え、地域というキーワードを軸とした新たな学びの機会に多くの期待が寄せられた。結果として初年度の2015年には9名、2016年5名、2017年には6名の入学学生を受け入れ、多少波はあるものの安定的かつ目的意識の高い進学者確保に成功したと言えるだろう。

初年度の入学学生9名は既に2年の過程を終え、この3月に無事全員が修了している。彼らの研究テーマを概観してみると、本学大学院地域デザイン領域の目指す方向性を示すとも言えるのでここで簡単ではあるが、研究タイトル、内容とその意義について紹介してみたい。

グラフィックデザイン学科教授の中山ダイスケ研究室からは1名が修了。ト・ハンの「地域資源を活用したブランディングデザインに関する研究」は、中国からの留学生であるトが、山形県の名産「紅花」の土産を対象物として、外国人観光客に向けて山形の魅力を伝えるブランディングデザインのあり方について考察、提案を行うものである。中国人の目からみた山形の魅力とそれを同郷の観光客に向けて発信する提案は目新しく、また実際に市内の農家や食育アドバイザーの協力を得て紅花の栽培から地域と深く関わりながら、完成度の高いグラフィック作品を生み出した点で評価が高かった。

建築・環境デザイン学科教授の志村直愛研究室所属は2名。菅原かずさの「民家から読み解く新しい暮らし」(図1)は、本学の西側西蔵王の麓に位置する岩波集落の民家に着目し、現代の若者がこうした伝統的な民家や生活風習に触れながら、場所の持つアイデンティティを伝える新しい暮らしの提案を実際の住宅設計案を通じて提言するものである。集落住民へのヒアリングや実測調査などを通じて地域の住生活文化を取材研究し、新しい住要求に答えるという、まさに山形の地域ならではの地方の文化を伝える重要なテーマに挑んでいる。深澤発の「宮城県仙台市における近代建築の現状と課題」(図2)は、自らの故郷である仙台市における明治から昭和戦前期の近代建築の詳細な分

布調査を行い、空襲を受けて失われ、さらに開発で数を減じる大都市の近代建築に注目し、地域のアイデンティティを示す文化の象徴として再評価し、その価値を広く市民に伝え広げ、積極的保存活用を促すPR手法を提案するものである。伊達時代の歴史を基軸にする仙台市の施策に対峙し、地元の建築保存団体との連携活動などを通じてそのあるべき姿を究明した姿勢は評価される。

同学科准教授の西澤高男研究室からは1名。永田光司の「地場技術と自然素材・建築資材を生かした空家改装



図1:地域デザイン研究領域修了生作品:菅原かずさ:「民家から読み解く新しい暮らし」:キャンパスに近い農村集落岩波地区の暮らし方調査を通じて伝統を守りつつ現代の生活に適応したライフスタイル、住宅の設計提案を行った。



図2:地域デザイン研究領域修了生作品:深澤発:「宮城県仙台市における近代建築の現状と課題」:全市域の近代建築分布を網羅的に調査。あぶり出された成果を戦前の市街地地図に重ねて表現した。

方法の研究」は、山形県内各地で増え続ける空家に注目し、そもそも本来豊かな自然と、技術を持った職人を有する山形において、それらを有効に結びつけ、リフォームを実現していくための考察を、実際のセルフビルドの改修を通じて検証、その可能性を提示していこうというものである。東北山形の地方特性の掘り出しと地方の社会問題とを結びつけようと試みる、この時代ならではの発想といえよう。

同学科准教授の渡部桂研究室からは1名。庄司はるか

の「中山間地域における土地利用及び森林管理の選択肢について」は、本学に近い西蔵王の山腹に位置する準限界集落八森を対象に、中山間地域での人口減少の中で、生活維持と里山保全のために土地利用や生業をどうコントロールしていくべきかを、丁寧な植生調査や住民ヒアリングを通じて地域住民の暮らしを読み解き、現実的な自然との付き合い方に目を向けた提案を行っている。現地に足繁く通い、東北山形ならではの地方の現実的な社会問題に意欲的に取り組んでいる。

企画構想デザイン学科教授の松村茂研究室所属は2名。濱田翔太郎の「コワーキングスペースにおける人間関係構築の研究」は、近年新しい働き方の受け皿として全国的に注目されつつあるコワーキングスペースについての研究で、特に全国の事例を網羅的にリサーチしながら特に東北、山形・宮城での事例を中心にその運営者と使い手の立場から理想の姿を追求した研究である。

斎藤康雄の「課外活動におけるコミュニケーションギャップの研究～山形県内の大学の事例から～」は、近年学生が学外活動として地域へ出向いての連携を行う際に発生するトラブルの事例に注目し、その遠因となるコミュニケーションギャップのありようについて言及した研究である。対象地を県内大学に絞り、トラブル事例と既存対策手法を取材し、有効な防止策を提起していくものである。

アートプロデュース分野の宮本研究室所属は2名。高木しず花の「食と器の協同の場における地域の魅力の再認識」は、芸術学部工芸コース出身の高木が、大学院ではデザイン工学専攻に籍を移し、自らの陶器制作を、地域の生活スタイル、食文化への考察を交えながら進め、地域の固有性を持つ器の提案を試みるものである。県内各地の飲食店で実際の郷土料理を出す陶器をテーマ性を持って試作提供するなど、地域に踏み込んで制作を進める意欲的な活動がユニークである。是常さくらの「異文化間の価値観共有のための媒体づくり～現代に流布する<鯨のイメージ>の問い直しから～」は、東北牡鹿半島をはじめとした国内各地や米国アラスカ州などをフィールドとして、鯨あるいは捕鯨に携わる独自の地域文化を取材、発掘。異文化の考察を通じて、相互の価値観共有を目指すために、その実態を伝えるリトルプレスや作品の制作を試みようというものである。研究者でもアーティストでもある本人のスキルを活かし、精力的な取材と制作により地域間交流のあり方を問う意欲作となった。

ここ東北山形の地で地域について学ぶ意義は何であろう。大学院のディプロマポリシーを見ればわかるように、その意義は修了条件、すなわち、1.歴史理解に基づく専門研究の追求、2.論理的思考と批評眼の習得、3.地域課題を解決するための研究態度の醸成、の中にも見出すことができる。1については、縄文の東北と称される通り、わが国の中でも特に深く長い歴史を伝える様々な遺構を残すここ東北山形の地が、こうした歴史理解を助ける最適なフィールドとして相応しいと言える。2については、特に批評眼について言えば先の震災復興に見る中央集権のビジョンと、現場である東北現地の感覚差、認識の隔たりなどをはじめとして、中央首都圏と地方東北という先入的価値観への批評の念は常に必要な視点といえよう。3については、そのまま地域デザイン研究領域の名称が示す通り、目指すべきは丁寧、丹念に地域課題を見据え寄り添う態度、研究姿勢であり、本領域の主題を示す条件と言える。

東北の地理的な中心に位置する山形の地は、豊かな自然環境と厚みのある歴史と豊富な歴史資源に溢れている。大学が建つ山形市は、県庁所在地でありながら、その都市スケールや人口規模としても大きすぎず、小さすぎない適正な規模であり、また周辺には大小様々な個性と、課題を有した豊かな現場が散在している。そして地域の主役というべき住民や地元企業などの本学に対する期待や、協力意識の高さはどこの町へ行っても申し分ない。このように大学周辺環境の質が極めて高い土地柄と言える。そういう意味では、学生たちによる地域デザインの研究、実験、実践活動の現場として申し分のないフィールドに囲まれた大学であるということができるだろう。

こうした環境と体制の元、3期生を迎えた本年度であるが、既存の領域の専門授業と新領域の授業との整合性とコマ数バランス、本学出身学生と他大学からの進学学生との成熟度、専門授業需要の格差、また来年創設4年目にして初の進学者が出る学部コミュニティデザイン学科の受け止め方などまた様々な課題を解決させる必要がある。しかし、常に学びたい意欲的な学生の立場に立った目線を大切に、公設民営大学の立場から地元山形県民、山形市民のみならず、東北全体からの期待に応える実践的研究教育機関として今後も積極的な教育環境の実現に努力していきたいと考える。